

百會とも見えたり、源氏にも、玄ほのやほあひとよめり、○中南海の潮道、入落たる船は留るよしなく、遂にかへらず、此道八丈が島に中るといへり、

〔祝詞考中〕大海のいと澳に、潮道といふありて、瀧よりも疾く、東へのみながるといへり、潮道は八方よりも有べけれど、その八百會までは、知べからねば、播磨と豊後日向の、潮道の行會もて、思はかるべき也、

〔大祓詞後釋下〕後釋○中現に聞及ぶ潮道も、國々の海に、これかれある中に、伊豆國より、八丈島へ渡る海中にある潮道、廣さ廿町ばかりがほど、いみじく早く、東へ流るとぞ、又紀國熊野の南の澳にも有て、東へ流るといふは、かの八丈の道なると、同じすちにやあらん、

〔延喜式八祝詞〕六月晦大祓之○中略准

遺罪波不在止祓給比清給事乎高山之末、短山之末與、佐久那太理爾、落多津速川能、瀬坐須、瀬織津比咩止云神、大海原爾、持出武奈、如此持出往波、荒鹽之鹽乃、八百道乃、八鹽道之鹽乃、八百會爾、座須、速開都比咩止云神持歌吞乎、

〔古事記下清寧〕爾袁祁命亦立歌垣○中於是王子亦歌曰、斯本勢能、那袁理袁美禮婆、阿蘇毘久流志毘賀波多傳爾、都麻多氏理美由、

〔古事記傳四十三〕斯本勢能は、潮瀬之なり、凡て海には潮の筋ありて通れるものなる、其を潮瀬と云、書紀に、此御句を一本易彌儼斗とあり、

〔源氏物語十三〕あやしきあまどもなどの、○中この風いましばしやまざらましかば、しばしのぼりてのこる所なからまし、かみのたすけをろかならざりけりといふを、き、給もいと心ぼそしといへばをろかなり、

海にますかみのたすけにかゝらずば、ほのやをあひにさすらへなまし